

通信

# いわて地域総研 迎春



西和賀町 厄払い人形

## 目次

- |  |       |
|--|-------|
| ●表紙写真  | 1P    |
| ●2022年度第2回連続講座「岩手の再生」<br>演題：「ウクライナ・ロシア戦争とロシアの戦争の文化」<br>講師：麻田 雅文さん（岩手大学人文社会科学部 准教授） | 2P～8P |
| ●会費改定のお知らせ   | 8P    |

NPO法人  
岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目8番21号 Mホール  
Tel・Fax:019-624-6715  
メール:i-chiiki souken@salsa.ocn.ne.jp

## 2022年度連続講座

「岩手の再生」

「ロシアによるウクライナ侵略と日本の平和・安全保障」第二回講座

演題「ウクライナ・ロシア戦争とロシアの戦争の文化」

講師…麻田 雅文さん

(岩手大学人文社会科学部 准教授)



2022年11月29

日(火)、岩手県民会館  
第一会議室で第二回連  
続講座が開催されまし  
た。オンラインでの参  
加を含め、40名が参加  
しました。

はじめに

(今回の戦争の4つのポイント)

今回のウクライナ・ロシア戦争で私が注目しているのは4点です。第一に、ロシアがウクライナに非常に執着しているということ。これは私の想像を超えていました。

第二に、これは起こるはずがないと言われて

いた大國間戦争というのが、再びこの21世紀に起こったということです。しかも、それがヨーロッパだということが、さらに衝撃でした。

第三に、今日の本題にもなりますが、ロシアの「戦争の文化」というのが、これは第二次大戦から考えても70年以上経ているにもかかわらず、まるで遺伝子のように継承されているということです。

第四は、新しいテクノロジーです。戦争はテクノロジーを革新させていくものですが、今回も色々な面で過去と繋がりのあるものだけではなくて、新しいポイントも見えてきました。

そして、恐らく今世紀の戦争の行方を占うものになるのだろうと思っております。

## 第一章 ウクライナに執着するロシア

ウクライナに対する執着は、プーチン大統領が前から公の場でも述べていました。2021年の論文「ロシア人とウクライナ人の歴史的「一体性」で、両者は「一つの民族」だと強調していました。

さかのぼると、こうした発想は、19世紀のナショナリズムの時代から見て取れるものです。その理念を体現した、3人が並んでいる絵があり、真ん中にいるのがロシアで、左右を固めているのはウクライナとベラルーシです。ロシア、ウクライナ、ベラルーシが共に手を携えれば、ロシ

ア帝国はうまくやっていけるといえるのを象徴したもので、当時のロシア帝国の国内向けのプロパガンダでした。これが、つまり21世紀になって再び蘇っているというのが現状です。

## 第二章 大國間戦争の再来

(遠のいていた大國間戦争)

今回の戦争は19世紀型の大國間戦争が帰ってきたということです。大國ロシアと中東欧地域では非常に大きなウクライナという2つの国が、正面から対決しているという図式です。

ソ連崩壊後は、大國間の戦争というのは起きないのだ。テロリストとかゲリラとか、そういう小勢力と国家の戦いになっていくという、いわゆる非対称戦争論というのが、90年代から主流になっていました。そこに今回の戦争が起きたので非常に衝撃が大きかったです。

## (ハイブリッド戦争)

21世紀の戦争を占うタームとして「ハイブリッド戦争」ということも言われました。大國間戦争は、正規軍対正規軍の戦いでしたが、非正規、つまりアンオフィシャルなところで戦争を展開する。

サイバー空間での戦争、SNSを利用したプロパガンダ。正規軍ではない民間軍事会社、これらが活躍するのがハイブリッド戦争です。

これらが新しい戦争の形なのだと思います。2014年3月、ロシアによるクリミア併合です。国際的には違法な占領なのですが、この時にクリミアで一応選挙を行ってから併合した。その時の選挙の結果が、97%がロシアへ併合を賛成したということで、この背景にあるのが、ハイブリッド戦争。つまり、クリミアの人たちにロシアへの併合をイエスと言わせるような、SNS上のプロパガンダや、テレビなどの活用が非常にうまくいって、かつ、どこの国の所属かわからない部隊が事実上、街を占領した上で選挙を行ったわけです。言わば目に見える暴力と、目に見えないところでのプロパガンダの組み合わせで、このクリミア併合というのは非常にスムーズに行きました。

### （戦争の先祖返りとしてのウクライナ・ロシア戦争）

ですから、ハイブリッド戦争というのが主流になるかなと思われていたのに、今回のウクライナ・ロシア戦争が起きました。そこで見えてきたのは、20世紀型、19世紀型の正規軍同士が正面衝突するという戦術でして、主力は戦車や火器が中心になっています。

こうした戦争の先祖返りは起きないだろうと思われていたのが、裏切られたところに衝撃があったのです。

そして、現時点でも、ヨーロッパで起こった最後の内戦であるユーゴスラビアの内戦の死傷者や難民をはるかに上回っている規模でして、大規模戦争がヨーロッパで起きたのというのがさらに衝撃的でした。

### 第3章 繰り返されるロシアの「戦争の文化」

「戦争の文化」という単語は、アメリカ人ジョン・ダワーが作ったものです。ダワーは戦争をしていく上で繰り返される特徴がある、戦争の中にその国の文化が透けて見えるというのがダワーの主張です。この発想からすると、ロシアもまた過去の戦争でやったことを今回の戦争でも繰り返しています。

#### (1) 戦術

#### （兵士の命の軽視）

兵士の命を軽んじる行動が今回の戦争でも多く見聞きされています。ロシア軍による友軍の兵士の遺体や負傷者の置き去りが目立つ。

今回は、ドンバスというウクライナ東部2州の独立を助けるために派兵しているというのがロシア側の大義名分なのですが、このドンバスで集めた兵士たちを、ロシア軍が軽んじている面が多い。ここから徴兵した兵士たちには、古い武器などを与えて、あえて標的にさせる。その上でウクライナ軍の位置を探って反撃するという、

非常にドンバスの人たちにとっては過酷な戦術をとっています。

#### （一歩も退くなく督戦隊の復活）

しかし遡ってみれば、いわゆる独ソ戦と呼ばれている1941年から45年まで戦われたナチス・ドイツの戦いでも、やはりソ連軍（当時の正式名称は赤軍）というのは、自軍の兵士の命が軽かった。

スターリンの名で出された、国防人民委員命令第227号と云うのがあります。命令のない退却というのは禁止です。逃亡した者は「懲罰大隊」というところに入れて、再び戦いに向かわせまします。この際、パニックに陥った者や臆病者などをその場で処刑してもいいという部隊を作りました。とにかく作戦の遂行第一なのです。ソ連軍の独ソ戦の戦いと同じやり方が繰り返されている4。

いわば督戦隊の復活です。「臆病者」などを処刑するため、後ろから味方の軍が撃つといいという部隊を再び作っているようです。ウクライナ側にロシア兵が投降しようとする、後ろから撃つということをするものですから、ロシア人も、うかつには投降できなくなっているというのが現状らしい。

#### （20世紀から火力重視）

一方、ロシア軍が力を入れているのが火力です。とにかく火力で圧倒すれば勝てるというのが、ロシアの戦争のやり方として強い信念になっている。20 世紀の初めの日露戦争の際、旅順の攻防戦で、山の上に向かって日本軍は攻めていったのですが、旅順の要塞が非常に強い火力で覆われていたことで日本軍がバタバタと死んでいった。

この伝統はずっと続いていまして、独ソ戦でも非常に火力を重視してソ連は戦いました。

1945 年 8 月の日ソ戦でも決め手になったのは火力でした。ソ連側は戦車 6000 両ぐらい揃えていました。それに対して関東軍が持っていたのは 500 両。勝負にならないぐらいの戦車を持ってきて、短期間で勝負を決めてしまった。

### (火力で圧倒したロシア軍)

今回も当初、ウクライナに攻め込んだロシア軍が効率的に占領地を増やせたのは、火力が圧倒的だったからです。逆に今ウクライナ軍がうまくいっているのは、その火力でロシア側をウクライナ側が圧倒するようになったからです。アメリカ側から提供された高機動ロケット砲システムが非常に有効で、遠距離からロシア側を攻撃できるようになった。どちらがどれだけ相手にミサイルを撃ち込めるかという勝負になり、

非常に古典的な戦争のやり方に戻っているわけです。

### (I) 戦争犯罪の容認 (増える戦争犯罪)

ウクライナ側の検事総長は、1 日に 2000 3000 件の戦争犯罪が起きていると言っています。6 月の段階で、すでに 1 万 5000 件を超えており、これをどんどん訴追していくという姿勢を示しています。

過去を遡ってみると、やはりロシア軍というのは戦争犯罪を起こしがちな軍隊ではあるということが言えます。それが端的に表れたのが、1945 年 8 月に行われた日ソ戦争です。数々の蛮行が記録されています。

### (蛮行が生じるメカニズム)

こうした戦争犯罪は、70 年代までの研究では、個人の行き過ぎが問題であって、組織だったものではないという見解がありました。現在は、こういう犯罪を起こしがちであるということは、送り出した社会や軍隊の構造に問題がある。つまり、ロシア側のほうに何かしらの問題がある、という考え方が取られるようになってきました。例えば、ロシア社会の中で、例えば嗜好品が不足している状況だと、腕時計が貴重品になるわけです。そうすると、戦場でそれを分捕るということをやってしまう。

ロシア社会の中で女性に対する蔑視があると、戦地でも女性を尊重せずに暴行する。基本的に、



自国の国民を大切にしない国、軍隊というのは、占領地でも占領下にある人たちを尊重しません。ですから、これはロシア社会の中に根ざしている何かしらの問題があるのだと考えるべきではないかということなのです。

### (大戦下の戦争犯罪の告発を抑圧し過去の戦争犯罪から学ばず)

さらに、ロシアは過去の戦争犯罪とは向き合わないというところがあります。なぜかと言うと、第二次世界大戦でロシアは勝ちました。あの戦争はグット・ウォー (Good War) なのです。たとえ戦争犯罪が起きようと、そしてロシア人が一説には 2700 万人近く死のうと、あれはグットウォー (Good War) なのです。

最近、その風潮は強まっていて、「不滅の連隊」という、毎年 5 月に行われている行事があります。自分の親類縁者で、独ソ戦で亡くなった人の写真を掲げて行進して、彼らを偲ぼうという行

事です。逆に言えば、ロシアで独ソ戦に従軍した人たちがやった戦争犯罪に目を向けようとか、改めて再検証しようという動きは歓迎されません。されないどころか、それを言い出すと、英雄を貶めるとして、刑事罰の対象とさえなります。

### (指導者の「黙認」)

なぜ、戦争犯罪が増えるのか。最後の理由として、指導者が黙認しているところが大きい。第二次大戦の終戦間際、ユーゴスラビアの代表団が、「ソ連兵がユーゴスラビアに入ってきて、あんまりお行儀が良くないです」ということをスターリンに言う。

それに対してスターリンは「君たちは兵士たちの気持ちを分かってない。彼らは英雄だ。だから何をしてもいいと思っているし、それを君たちみたいな上品な知識人の観点から見ると間違ってている」というようなことを言って、ユーゴスラビア側の反論を封じてしまう。

ユーゴスラビアで行われている戦争犯罪に対しては厳しい目を向けるな、というメッセージです。こういうふうな指導者が黙認してしまうと、当然下のほうは、これはやっても大丈夫なのだと思ってしまう。もちろん、スターリンはやれと言っているわけではない。ただ、下のほうは、どうしてもそういうメッセージとして受け取りません。

### (虐殺部隊を称賛)

今回はもつと露骨でして、ブチャというところで多くの虐殺された遺体が見つかりましたが、このブチャを占領下に置いたロシア軍の部隊をプーチン大統領が、あえて親衛隊という称号を与えて称賛しました。よくやったと。

これはロシア軍全体に誤ったメッセージを送っていると思います。戦争犯罪を行っても問題はないと。むしろ戦争の遂行の上で有利だったら、奨励すらされる、誤ったメッセージになっていると思います。

### (囚人の動員)

最近になって、刑務所から出所した兵士たち、あるいは刑務所でまだ刑期を務めている兵士たちの動員というのが問題になっています。

古くは日露戦争のときに、日本軍が樺太(サハリン島)を攻めたのですが、樺太は流刑地だったので、流刑囚たちが武器を取って日本軍と戦ったという例があります。もつと大規模に行われたのが、独ソ戦のときで、100万人ぐらいが強制収容所から出征したと言われています。

囚人の動員というのは、ロシア側のひとつの特徴です。

### (ワグネル・チャレンジ)

今回の戦争でも同じことが起きている。ロシアには非正規軍として「ワグネル」という民間軍事組織を活用しています。このワグネルの代表が、刑務所にわざわざリクルートに向いて、彼らを戦線に送っている。11月にはプーチン大統領自身が、最近出所した人も動員の対象にしていいという法案に署名してしまっていて、つまり犯罪者を積極的に軍に受け入れようという動きをしているわけです。彼らはリクルートされて行くのですが、大体投入されるのは激戦地。「ワグネル・チャレンジ」と言いますが、半年間生き残ることができない人のほうが多いということが言われています。

### (1)住民の強制移住

#### (ロシアへの連行)

今回の戦争でも、かなりのウクライナ人がロシアに連行されていると言われています。シベリアといった東部などに送られているのではないかと、西側の持っている疑惑です。6月の段階でロシア国営のタス通信でも、だいたい160万人が開戦後にウクライナからロシアへ入国したということを経道しています。大量のウクライナ人がロシアに行ったことは間違いない。その中には30万近くの子供たちがいるということもロシア側は認めています。彼らについては、避難させたのだというのがロシア側

の主張です。

### (過去の連行事例)

こうした住民の占領地からの移住というのは、20世紀の戦争からロシア側が行ってきたことです。1939年、第二次大戦でポーランドをドイツとソ連で分割しました。ポーランドの占領したところから40万人近くをソ連領内に連れて行くのです。大体その二割、つまり8万人ぐらいが死んだと言われています。

翌年にバルト三国(エストニア、ラトビア、リトアニア)をソ連が占領するのですが、やっぱり同じようなことをしました。まず旧体制の関係者を連れて行く、その後、ソ連に対して協力的ではない住民というのでも連れて行きます。

実は、ウクライナも第二次大戦で勝っていたにもかかわらず、同じような目に遭っています。1949年の時点で11万人近くが大戦後、極東方面に追放されました。ソ連側の言い分としては、彼らはナチス・ドイツに協力していた連中だから、ウクライナからロシア極東に連れて行き、再教育するというのです。実際は、矯正ではなく、強制労働です。

日ソ戦争の際にも同じことが起こりました。いわゆるシベリア抑留です。この時、関東軍の日本軍人を中心に、およそ60万人がソ連領内に連れて行きました。

### (強制移住の背景)

ロシアは、なぜこのようなことをするのか。一つは、自国の領内で労働力が足りない部分にそれらを充てる、強制移住させた人たちを労働力にするということです。

第二に、占領したあとのことを考えて「不適性国民」、つまりソ連の占領に対して快く思っていない人たちを、最初から排除してしまおうという意図が働いていると思われます。

第三に、ソ連が統治する上で、彼らがいなくなつたあとに、自国からロシア人を移住させるのが狙いであろうと思います。ですから、結局のところ占領統治のことを考えて強制移住をするということなのですが、これは、最終的には恒久的にロシアの領土にしていくという意思の現れでもあります。

### (4)人口、領土、資源の収奪

#### (占領地のロシア編入)

今回の戦争の特徴は、ロシアがウクライナの領土を編入し続けていることです。占領地のロシアへの編入が戦争と並行して行われています。2014年からそのプロセスが進んでいまして、クリミア半島という、ウクライナの正式な領土がロシアに併合されたのが始まりでした。今年の2月、開戦直後にドンバスと呼ばれているウ

クライナ東部の2州をロシアが独立を認めるということをやりまして、9月には、ヘルソンなど4つの州をロシア領にしてしまいました。戦争をしながら領土を併合するというのは、ありさうで実はないのです。

#### (第二次大戦におけるソ連の領土拡張)

例えば日ソ戦争では千島列島・南樺太が併合されたのは戦後半年くらい経ってからでした。そう考えると、戦争しながら領土を併合するというのは珍しい。

第二次大戦では、連合国側に立ってソ連は戦いました。連合国側は1941年の大西洋憲章などで、基本的に戦後も領土の拡大は求めないということを前提に戦っていた。これを承認した上でソ連も連合国側に参入したはずですが、ソ連は第二次大戦において領土の拡大をしたという、連合国の中でも珍しい国です。

例えばポーランド、フィンランドの一部を自国領にしました。モルドバとバルト三国は、第二次大戦前は独立国でしたが、完全に占領下においてソ連に組み込みました。それからドイツの一部、現在のカリーニングラードも領土化して飛び地になっています。南樺太・千島列島については皆さんご存じの通りで、連合国の中で戦争の結果領土を拡大した国というのは実はないのです。

ソ連時代ですが、ロシアはそういったことをした国で、これが戦争の結果、領土を取るの当たり前前という発想の一つの根拠になっています。

#### (奪われるウクライナの資源)

資源も大量にロシア側に奪われている状況です。穀物を刈り取って持っていかれてしまう。貴金属、鉄製品が奪われている。文化財も、ウクライナ側の主張では、占領下に置かれた博物館からどんどん収奪されている。さながら、中世の戦争のような様相を呈しています。

#### 第4章 「戦争の文化」の革新

今回の戦争では非常に色々な新しい面、つまり過去の戦争ではなかったような面というのも出てきています。言わば「戦争の文化」の革新です。

#### (武器としてのデバイス)

今回の戦争で大活躍しているのがデバイスです。ウクライナとしてはネットワークを維持することによって戦争で成功していると言っても過言ではない。デバイスによって国民と繋がっているのがウクライナの強みです。

ウクライナは戦前からワイファイ、携帯の普及率はとても高かった。防空壕の中もワイファイ完備です。

#### (SNS「制脳権」の最前線)

今回の戦争は、一面ではSNSの中でも戦われています。サイバー空間の中で戦われている今回の戦争は、第五の戦場だという言葉も言われるようになりました。陸海空と宇宙で4つ、そして五つ目がサイバー空間だということです。サイバー空間を通して世界の人々の支持を集めるという意味では、ウクライナがすでに勝ったと言われています。圧倒的にウクライナに同情が集まっている。

こうした状況の中で、SNSの「制脳権」と言いますけれど、皆さんの頭の中でどちらを支持するかという戦いは非常に激しい。ウクライナ政府にせよロシア政府にせよ、彼らの意見、あるいは彼らの意見の影響を受けた人達のツイートをリツイートするか「いいね」するだけで、もうすでに戦争に参加していると言えます。皆さんも戦争の当事者かもしれません。

#### (サイバー攻撃) (データを救え)

こうしたサイバー空間における戦いを、もちろんロシア側は劣勢で黙ってみているわけではない。サイバー攻撃です。つまり違法なハッキングなどによって、システムをダウンさせるなどの行為を行っています。かつ、そのサイバー攻撃によってロシア側はウクライナの記憶、つまりそれまでウクライナ人が撮ってきた写真とかウ

ェブサイトとかを消している。

逆にウクライナは、それらのデータを保存するための作業を熱心にやっています。

#### (「雄弁な」CCTV)

防犯カメラやトライブレコーダーなどのCCTVが、実は非常に重要な役割を果たしているのはあまり指摘されません。しかし、人間が介在しないで勝手に記録してくれる装置が、今回の戦争で非常に活用されています。つまり、思わぬもの、人間が写せないものも写してしまう、端的に言えば戦争犯罪です。ロシアの戦争犯罪の中でも、ウクライナ人の連行や誘拐というのは、もしデバイスで撮影していたら、撮影している人にとつて危険です。しかし、防犯カメラだったら危険なくやってくれる。こうした映像が流れて、非常にロシア側への印象が悪くなっているという面があり、重要な役割を果たしている。

#### (衛星「高解像度の戦争」)

衛星システムをウクライナ側が活用していて、ウクライナ軍の戦争遂行に重要な役割を果たしていると言われています。もちろん衛星というのは冷戦時代からありましたが、これがどんどん高解像度になっている。軍事用のものになると特に解像度が高い。それが戦争犯罪の可視化にも繋がっています。

### 〔訴追される戦争犯罪者〕

その結果、戦争犯罪者の訴追というのが戦争と並行して進められています。過去の戦争犯罪の訴追は東京裁判などが代表的で、戦後行われましたが、現在は同時進行で行われている。ウクライナ側は戦争犯罪者たちを、CCTVや衛星画像で特定し、訴追までやっている。これは戦争犯罪を抑止するという意味では、非常に大きなポイントになっています。

### おわりに戦争の見通し

#### 〔勝利による敗北〕〜エドワード・ルトワック

ウクライナに侵攻したロシア軍の当初の狙いは、ゼレンスキー政権の転覆と、ウクライナの占領だったと言われています。これには失敗しました。しかし、これで完全にロシアが失敗したかという点、4州の併合など非常に広い地域の占領には成功しているわけです。ところが、アメリカの戦略論の大家、エドワード・ルトワックが唱えた「勝利による敗北」、つまり「勝つことで負ける」という考え方があります。

戦争で勝ち続けると、敵の占領地までどんどん深くまで攻め入ります。ウクライナの領土に入り込めば入り込むほど、ロシアから遠ざかる。その結果、補給が続かない。実際にウクライナを占領したロシア軍では、補給がうまくいって

ないという話はよく聞きます。その結果、軍隊がどんどん弱くなっていきます。

国際政治の面においても、勝ち過ぎると、周りの国がどんどんその国を嫌いになる。端的に表れたのは、スウェーデンとフィンランドのNATO加盟問題だと思います。両国はこの戦争前まで、中立を維持している国でしたが、ロシアへの態度を一変させました。これは、侵略されたウクライナの二の舞は演じたくないからです。

このように、開戦当初に勝ったロシア軍も、次第に敗北に追い込まれているのではないかと考えられます。

#### 〔ロシアの撤退を阻む「血債」〕

戦争は、続けられ続けるほど、犠牲者が増えます。結果として、戦争を遂行している政権側は「血債」を負うこととなります。国民の命を犠牲にして戦っているのです、その犠牲に見合う成果を収めないと、その政権は、戦争を止められないことになっていきます。犠牲が増え続ける以上、ロシアはたとえ劣勢でも、何かしらの代償を得ないとこの戦争から出られない。端的に言うとな泥沼化しているわけです。事情は、ウクライナ側でも同じでしょう。

#### 〔どこまで犠牲に耐えられるか〕

双方が、どこまで犠牲に耐えられるかが勝負です。戦争というのは、必ず政治的な目的があります。

す。ウクライナの支配というのがロシア側の目的です。ウクライナからすれば、国境の外にロシア軍を追い出すということです。この目的と犠牲のバランスの中で、もしその犠牲が目的よりも多すぎるとなれば停戦に至るわけですが、現在の状況を見ると、お互いに今出ている犠牲はその政治的な目的よりも少ないと見ている。となるとこの戦争は続く。少なくとも両国がこういふふうな継戦の意思を示している限り、この戦争は多分止まることはない。どちらか一方でも止まりません。そうなるはまだまだ続くという点になっていくというのが私の見立てです。

(文責 岩手地域総合研究所事務局)

### 岩手地域総研 会費改定のお知らせ

物価上昇の折、大変心苦しいことですが、当研究所の「住民と自治」誌購読会員の皆様の会費を4月から改定させていただきます。

ご存じのとおり、自治体問題研究所の財政危機から「住民と自治」誌の価格が月210円値上げされることになりました。

そのため、「住民と自治」誌購読会員の年会費が2,520円増となります。事情をお察しの上ご理解をお願いいたします。

岩手地域総合研究所 事務局